

令和5年6月26日（月）令和5年度第1回富山県成長戦略会議 議事要旨

<開催概要>

- 1 開催日時 令和5年6月26日（月）14：00～15：30
- 2 開催場所 県庁4階大会議室、オンライン
- 3 出席者（五十音順）
 - 安宅 和人 慶應義塾大学環境情報学部教授
Zホールディングス株式会社シニアストラテジスト
 - 朝比奈 一郎 青山社中株式会社筆頭代表CEO
 - 齋藤 滋 富山大学学長
 - 高木 新平 株式会社ニューピース代表取締役CEO
 - 土肥 恵里奈 株式会社ママスキー代表
 - 中尾 哲雄 富山経済同友会特別顧問
 - 中村 利江 エムスリー株式会社取締役
エムスリーソリューションズ株式会社代表取締役社長
 - 藤井 宏一郎 マカイラ株式会社代表取締役CEO
 - 藤野 英人 レオス・キャピタルワークス株式会社代表取締役会長兼社長
 - 藻谷 浩介 株式会社日本総合研究所主席研究員

<議事次第>

- 1 開会
- 2 挨拶
富山県知事 新田 八朗
- 3 議事
 - (1) 令和5年度の成長戦略の主な取組み状況について
 - (2) 令和6年度に向けた成長戦略の重点的検討課題
 - (3) 今後のスケジュールについて

1 開会

2 知事挨拶

- ・前回、この会議は3月に開催した。役所なので3月が前年度ということになる。令和4年度3月に、令和5年度のアクションプランについて御報告をしたというのが前回の会議。そして現在、令和5年度に入り、ブランディング推進本部、また官民連携・規制緩和推進本部という組織も新たに加わり、このアクションプランの実行に取り組んでいるところ。
- ・思い返すと、2021年2月19日に、委員10名プラス特別委員の安宅和人さんを加えて11名でこの議論を始めた。その後、この成長戦略会議があくまで基本、幹だが、そこに枝や葉が広がっていき、様々な富山県の政策が実行されているという現状を見ると、改めて感慨深いものがある。この間に、当初メンバーであった吉田守一さんが、富山県庁の公民連携推進監に就任されたので、この成長戦略会議の委員からは抜けられた。この会議は定員があるわけではないが、よりまた議論をパワーアップさせるという意味で、青山社中の朝比奈一郎さんに加わっていただくこととさせていただいた。後ほど一言御挨拶をいただければと思う。
- ・昨年の2月に策定した富山県成長戦略だが、初年度の令和4年度は実行の年と位置づけて154のアクションプランに取り組んだ。そして、令和5年度は、この成長戦略を深化させて、そして浸透させる年と位置づけたいと考えている。その一環として、会議も原則公開して、大いに県内外に発信をして、この取組みを浸透させていきたいと考えている。
- ・本日は、プロジェクトチームあるいは専門部会でいろいろと議論いただいて抽出された課題を御披露させていただき、令和6年度に向けた重点課題を議論していただきたい。どうか今日も、2年前から変わらぬ自由闊達な突き抜けた御議論をお願いしたい。

朝比奈委員より挨拶

【朝比奈委員】

- ・皆様、こんにちは。
- ・私は、富山県との御縁でいうと、数年前から魚津市でアドバイザーをしている関係で、県庁にも何度かお邪魔させていただいていた。そういう中で、ありがたくも御縁をいただいた次第だが、もともと霞が関にいたときに、霞が関の構造改革とか、行政改革に携わった経験もあることから、恐らくそういう関係で、県庁のオープン化プロジェクトの座長も拝命するに至った。去年まで藤井さんに大変頑張ってもらったものをしっかり受け継いで、さらなるオープン化に向けて頑張りたいと思うので、どうぞよろしくお願ひしたい。

3 議事

(1) 令和5年度の成長戦略の主な取組み状況について

(事務局より資料1に基づき説明)

【土肥委員】

- ・ウェルビーイングのお花の指標が出来上がって、少し期間がたった。初めは県民に向けてウェルビーイングを意識づけたり、自分がどのぐらいの状態なんだろうと気軽にウェルビーイングに親んでもらうための一つだったと思うが、完成して、しばらくたって意識し始めてどう変化したかなというのを、みんなが意識して繰り返しやってもらうことが必要かなと思っており、完成して終わりにならないようにしたい。
- ・例えば、会社単位でウェルビーイングの指標をはかって、その結果、ウェルビーイングなアクションをみんながどう起こしたかみたいなところを評価制度の中に取り込んでみるとか。あとは新卒採用とか中途採用とか企業サイドは人材不足に苦しいときでもあるので、ウェルビーイングな会社として、社員は今こういう方が多いよということが、採用における共通言語としてその指標が活用できるということが出てきたりするといいなと感じている。そういったアイデアもこの会議の中だけではなく、様々な、例えば経済団体とかそういったところで議論が進んでいくといいなと感じた。

【齋藤委員】

- ・G7の教育大臣のサミットが行われて、ウェルビーイングが取り上げられ、世界各地でいろんな子供たちのウェルビーイングを教育面で高めていきたいと思いますという宣言がなされた。
- ・ぜひとも、小中高の子供たちがどういった形で自分たちの教育環境、ウェルビーイングが改善しているのかというデータを取っていただき、富山は本当に教育で、単に勉強しているだけじゃなくいろんな形で知識を学ぶことが面白いんだ、それからいろんなところへ探求しに行って自分が達成感を持ったという形で、ウェルビーイングを高めるような形の指標を定期的にとっていただきたいと思う。今、そういった計画はあるか。

【牧山ウェルビーイング推進課課長】

- ・御指摘がございましたとおり、子供のウェルビーイングが今回、G7で非常に脚光を浴びたところ。我々も昨年度来、子供のウェルビーイングについて、いろんな場で御提言や御示唆をいただいている。学術的な分野からいろいろ御意見もいただいている中で、主観的なウェルビーイングを加えるときに、子供の場合、自我が形成される過程にあることから、どういうふうに問いかけてウェルビーイングを把握するかというところはまだ研究途上にあると伺っている。
- ・まずは、指標をつくるに当たって行った県民意識調査の範囲を18歳以上から15歳以上に拡大し、できるだけ若い方々のウェルビーイングの意識を把握するように広げたいと考えている。こういったところから徐々に、学校や子供が地域でどういうふうに感じて暮らしているのかということも、子供に分かりやすい形で捉えるということこれから勉強していきたいと考えている。

【齋藤委員】

- ・ぜひお願いしたい。15歳とは言わず、小学校の教育で単に物を教えるだけではなくて、ウェルビーイングはみんなでもよくしていきたいと思いますという意識もあるので、みんなで勉強して、学校行くのが楽しいとか、給食が楽しいな等そういう校風をつくっていただきたいと思う。子供たちは本当に心がピュアというか純粋なので、いろんな形でサポートしてあげるとすごく伸び代がある。子供たちは私たち県民の宝でもあるので、そういった子供さんを大事に育てていくという形で、ぜひともお願いしたい。

【安宅委員】

- ・ウェルビーイングについて、1つは、やっぱり負の除去みたいなのが基本なんじゃないかと思う。例えば、金融資産がありますかという割合の調査は何十年もずっと取られているが、三、四十年前は3%ぐらいしかいなかった資産が低い世帯が今3割を超えている。なので、貯蓄すらないという世帯がゼロに近づくというのは、ウェルビーイングの基本。
- ・あと女性のリプレゼンテーション(representation)を十分に高めること。ここの会議も極度に私のようなおっさん志向といえますか、全くもって残念な状況。なので、高等教育への進学に当たっても、基本的には男女同数行くべきだと思うし、さらに日本を一步出て例えば米国に行けば、ジェンダー選択とは「女、男、ノンバイナリー（どちらでもない）、答えたくない）の四択が標準。富山県では性別、1：男、2：女、それで終わりという記載様式は禁止しちゃったほうがいい。「女、男、ノンバイナリー、答えたくない」にしたほうがいいと思う。
- ・さらに、先ほど学校の話で出ていたことが非常に重大だと思うが、週末、とある北関東の非常に疎な空間の中学校で2時間ぐらい話をしていたが、学校が好きか嫌いか、どっちかを選んでくださいと言うと数名を除いてほとんどすべての生徒が「好きじゃない人」に手を挙げた。すごく平和なところでめっちゃくちゃいいところだったんですけど、結構そこに驚愕し、そこにいた教育長以下皆さん衝撃を受けて、混乱に陥った。理想の中学校について考えようというセッションだったのに、我々が想定外の「臭いものに蓋」の蓋を取るセッションみたいなのがあり、ちょっと大変だったが、あれは全部正直。
- ・同じような話が多々あると推定され、そういう学校に行きたくないとか、学校はどちらかというところつまらない場所だと思っている人の割合を可視化してしまっただけ、それを激減できるようにするというのがやっぱり基本だと思う。かなりの学生が、いじめがない学校がいいけど、やっぱりありますみたいなことを普通に言っていたので、そんな田舎でもそうだったら多分、より都市部の多くの学校とかはそうだと思う。
- ・平和な人じゃない人をとにかく激減させるというのはウェルビーイングの基本だと推定され、あるいは災害に遭ったとき、レジリエンスであつという間に直るとか、論理的にはパンデミックがまた来ると思うが、そういうときにも潰れないとかが多分ウェル

ビーイングの基本。平常時ではないところ、あるいは平常時じゃない人を激減する、平常時じゃないときにすぐに復旧できるということに力を入れるのは結構重要じゃないかなと思う。

【藤野委員】

- ・G7の話の中でうれしく思ったのは、石川と富山の連携というところがあって、私もいろんな地域を見ているが、隣の市とか隣県とか、大体仲が悪い。全国的に仲悪いが、もちろん石川と富山もいろんな感情があるのはよく理解していて、ただ、私たちが掲げる「幸せ人口1000万」という、これは非常に私は気に入っていて、要は自分たちの地域が幸せになる、ウェルビーイングであるというのは当たり前で、そうではなくて、僕らの周りの人たちも幸せにしてこそそのウェルビーイングだというのが、多分その「幸せ人口1000万」というスローガンだと思う。これはどこにもない、非常に強いメッセージがあると思う。
- ・それを考えるのに、当然、隣県である石川県と仲が悪いという状態であるのは非常に望ましくない。つながっている、もしくは深く交流するという状態であることが望ましいということなので、こういう隣県とかの地域の交流、また、ウェルビーイングという観点のところで、自分たちの富山県だけではなくて、石川県そのものをどうやって幸せにしていくのかという目線があると、結果的に富山県そのもののウェルビーイングの度合いが上がってくるのではないかなと思った。そういう面で見れば、今回の取組みの中でそういうつながりが見られたという御指摘があったことは非常に喜ばしいこと。
- ・子供を大切にするというところで、これはもうまさに共に学ぶ、共に成長するというところが非常に大事なところかなと思う。やはりこれから少子化、それから人口移動というところで、都市部への人口流出というのは、他地域も含めて、これから加速する可能性が高い。その中で、やはり学校教育そのものが非常に充実している、かつ、先ほど齋藤委員からもあったとおり、その中で楽しく学校で学べるということがすごく大事で、安宅さんが先ほど御指摘されたとおり、学校に行くのが楽しいということがウェルビーイングらしい指標。なので、僕らはそのウェルビーイングの指標の中で、実際にテストの成績がいいということだけではなく、富山県の学校は、日本の中でも行くのが楽しいんだ、学校の満足度が高いんだということが指標になっていると、より先端的だし、かつ、今の若い親世代における考え方かなと思った。

【安宅委員】

- ・藤野さん、すばらしいお話ありがとうございました。
- ・1つ、今、先ほどの中学校での面白い事象をシェアすると、なぜ皆さんは学校に行くのかというアンケートを取ったが、最大の回答項目が結構我々に衝撃を走らせた。「義務だから」だった。圧倒的に義務というのが多かった。楽しいとか、何かしたいからはほぼ皆無。そこははじめが少ない学校だが、それでもはじめが問題視されていたし、みたいなのがあって、やっぱり行くと楽しいところって大事だと思う。
- ・私は富山で中学生生活を送って、校内暴力世代なので毎日のように校内暴力を見ましたけど、楽しかった。それも含めて、毎日プロレスを見ているみたいで面白かった。だけど、何で校内暴力世代の私の方が楽しいんだろうということについて、極めて疑問を感じる。何で君たちは何の暴力もなく楽しくないのという感じだった。やっぱりうきうきしていく場所であるべき。外れ値みたいな人が楽しくいられる場所であるというのはやっぱりすごく重要で、芋版みたいな人を育てるために学校があるわけじゃないので、その辺はぜひ、とすごく思う。
- ・それ以外で、昔は何で校内暴力みたいなことがあったかといったら、髪型はこの3つ、女の人はこう、男はこれみたいなことをやっていたから。いろんな多様性を受け入れて、みんな幸せになれるかどうかみたいなやつが、本当に中学生とか小学生の多分、鍵だったりするので、その辺が大事かなと思う。

【藻谷委員】

- ・これはY o u T u b e で中継されているというので、もしかしたら初めて御覧になって、何だこの会議はと仰天している人がいるかもしれないので、何でこんな議論になっているか、解説を入れさせていただきたい。何でその外れた人の話ばかりしているのと、真ん中で普通にやっている人を置き去りにするのみたいな議論が必ず出そうなので。
- ・「私は別に普通に楽しいし、つらいことも含めて真面目に仕事をしているので、そういう普通にまともな人間である私たちのことを見ずに、そこから外れちゃって何かつまらないとか、ウェルビーイングじゃないとか言っている人の相手ばかりしているのが県の仕事なんですか」と思う人がいるはずなので、その人向けの解説を一言申し上げ

る。

- ・富山県は非常に多くの人々が、「そうは言うけど、ここはそこそこいいところだ」と思っていて、そして真面目に働いて、ちょっと毎日行くのが嫌だけど、一生懸命働いている人がほとんど。そういう普通にまともに楽しく嫌なことも一生懸命やっている人だけを優遇というか、そういう人たちがハッピーな県としてやってきたら、ものすごい勢いで人口が減ってしまい、とても豊かで、いろんな数字を見ると、所得も健康も自然景観、家の広さ、飯のうまさ、ありとあらゆるところが極めて全国トップで優秀なのに、全国の下位で人口が流出して、特に若い女性が戻ってこない、なぜだって。すばらしいと言うけれども、この状況にやっぱりなじめない、嫌だ、出ていきたいという人が実は非常に多いんですよというところからこの成長戦略会議が一昨年始まりました。
- ・ですので、今、安宅委員などがおっしゃっていたり、ほかの皆さんも賛同していて、誰も反対しないと思われるかもしれませんが、富山にいてハッピーな人だけハッピーにするという富山県庁を一步出て、富山にいたんだけど、ちょっといま一つハッピーになれない、なぜ、という人たちも、今までハッピーな人はそのままハッピーでどんどんやっていただいて、ハッピーじゃない人も、何とか包み込んでみんなで一緒に多様な富山県にしたほうがいいよねという議論の延長。
- ・確かに、公共というのは、考えてみると自分で何とかできる人を助けるのは本当は公共じゃなくて、何とかしたいんだけど、どうもならない人を、やっぱり病気になった人を診るのが医者であるように、生活に困った人を助けるのが福祉であるように、別に健康も大丈夫だし仕事もしているけれども、でも嫌なんですという人たちも含めてもっとハッピーな富山県にしなきゃいけないという、全国的に見ても非常に先端的なことをしていると。
- ・そのときに、じゃ、一体誰が、そんなのはそういう人たちが自分で自覚すればいいじゃないかみたいなことを言うんですけれども、それがやっぱり違うと思うのは、今日の資料1の5ページ目、「若い女性のウェルビーイングの向上に向けた取組」のところ。「就職期の女性に選ばれる富山県」キックオフ会議を開催、今年8月8日には天野先生が、「女性人口が生み出す富山人口の未来ーなぜ富山存続のキーマンは「経営者」なのかー」という題名で基調講演されるとのこと。これはすばらしい題名だと、ぜひこれは一言言いたい。今までの話だと、富山存続のキーマンは、富山が嫌でウェルビーイングじゃなくて出ていくのはあんたでしょう、というのは違う。そういう人たちを包み込まずに、

出ていきたいやつは出ていけばいいんだ、俺たちは普通に働く普通の人間しか採らな
いって言ってやってきた経営者のほうが実はキーマンなんですよという、実はこれは
コペルニクスの転回であり、空が回っていると思ったら実はあなたの問題だったとい
うことだと。

- ・私はこの題名がとてもすばらしいと思って一言褒めたかった。決して私が会議を運営
しているわけではないが、一昨年からずっと出ている者として、こういう流れだったよ
ねということを一参加者として改めて確認させていただきながら発言した。

【藤井副座長】

- ・1点だけ、子供と教育の話が大分出てきたが、教育の話は人材育成の観点から新産業戦
略P Tでも結構話した記憶がある。その際、ともすると詰め込み過ぎるという話をよく
していた。要は、新しい時代だから、I Tだ、S D G sだ、S T E Mだ、S T E A Mだ、
非認知能力だ、プロジェクトベースラーニングだ、探究型学習だと言って、それを本
当に学校の現場は吸収し切れるんでしょうかと。さまざまな意見に対しては、常にそれ
に対するカウンターとして、リソースの問題が提起されていた。これがイノベーション
だ、これが世の中の流れだと言って、インフラがないまま無理なものをしていくとい
うのは堅実なやり方ではないし、それでやったら絶対に現場が壊れるし、うまくいかな
い。かといっていきなり先生を増やしましょうというものなかなか、1プロジェクト
チームからは提言ができなかった。その中で、今回、富山・金沢宣言の中で教員の確保・
配置の充実というのが入ったというのは、ものすごく喜ばしいことだし、力強いことだ
と思っている。1プロジェクトチームでは提言できなかったことが、こういった大きな
政治の流れの中で入っていくというのは、やっぱりサミットをやってよかったなと感
じた。ぜひ学校の現場が、先生方含めて充実できるような体制になっていければと思
う。

【安宅委員】

- ・今のシステムにうまく合わない人たちが大事だという話をさっきした。ソーシャルデ
ィバイドというか、貧困層問題をどうにかという話と、教育の話、女性の話をしたが、
もう1個、実は重大なのはシニア。
- ・今は、最頻死亡年齢は女性が92歳、男性が88歳で、90歳近くまでほとんどの人が普通に

生きている社会だが、例えば定年とかで、65歳で社会から仕事を奪われたりしたらつまらなくなる。そこで妻に先立たれたりすると、結構な人が極限的に不幸になったり。夫に先立たれるのは普通なので、実は不幸度はあまり上がらないというデータを見たことがあるが、男性の場合、奥さんに先立たれると3.5年寿命が縮まるという統計データを見たことがあって、これは衝撃的なインパクト。

- ・私の実家のある辺りでも、男性1人になっちゃった家とかで、つらくなって何人かのおうちで実際に自殺された事例を知っている。多分もう全日本で起きている。東京でも何件か知っていて、男1人って結構地獄を招くケースが結構あって、これらは子供と同じぐらい重要な問題で、みんな歳とりますし、老化は病気じゃないので、年をとっても楽しく元気にわくわく生きていける街が絶対いい、これは。
- ・この議論が、小学校、中学校の話と同じぐらいの重要性がある。人口の割合も極めて巨大ですし、我々の恩人であり社会の功労者そのものであるシニア層をいかに守るかというのは、同じくどこかの塊に視点として入れておくのが重大だと思う。

(2) 令和6年度に向けた成長戦略の重点的検討課題について

① ウェルビーイング戦略PT・少子化対策・子育て支援専門部会

(事務局より資料2に基づき説明)

(PT座長より補足説明)

【中村委員】

- ・委員の中でも議論が多くあり、シニア世代とか働き盛りとかいろんな方々のウェルビーイングを向上したいという話が出るが、限られた予算の中で、しかも効率的にきちんとやっていかないといけないという議論が出た。
- ・まず、本年度、来年度については、20代の若い女性が県外へ出てしまっている件、彼女ら当事者に働きかけるというのも非常に大事だが、行かないでと言っても、県内に行きたくない環境があったら外に行ってしまうので、1つは受入れ側のキーマンである富山県の経営者の方々の意識改革がまず一番大事なんじゃないかなと思ひ、そういったことを議論した。
- ・キーマンである経営者の方々の意識が変わると同時に、当事者である若い女性も、20代になって大学へ行って東京がいいなと思ってしまったら駄目なので、行く前に、もう高校生とか中学生の段階で、富山ってすごくいいよねというところを意識していただ

くという、この両面からの活動が、まずは第1弾として非常に重要なんじゃないかなと
思っている。

- ・本来なら、富山県民全員とか周りの方全員にウェルビーイング向上施策ができればいいと思うが、データとしてここを重点的に攻めなきゃいけないところから進めていければと考えている。

【安宅委員】

- ・複数の話が入り交じっているような気がして、若い人が出ていくという話と子育ての話は別な話で、例えば高校を出て、大学や職場のために都市部に出ていくのは、半ば当たり前。それが都市の機能なので。むしろ出ていく力があること自体は悪いことではないので、その話ではない議論を多分うまくしなきゃいけない。すてきな人たちが、例えば学校へ行った後、戻ってくるとか、外からじゃんじゃか学校も含めてやってくるとかという求心力の話、魅力の話でウェルビーイングにつながっているんであったらいい。何か論理的に若干リンクがちぎれていて、引き寄せるデバイスなのか、理由の話というのが入り交じっている気がする。
- ・少子化の話については、これは半ばある種の富裕化に伴う単なる帰結のようなところがあり、年をとると子供が減るとするのは普通に起きること。それで、人口調整局面なわけだが、これはファクトフルネスにあるものをそのまま豊かになったら長寿になるけれども、子供は減ると。それで、インドなんていうのは出生率6だったがあつという間に三、四十年で2.1を割った。これが世界的な話で、この話は何でこうなのかという話で、豊かさからきちちゃっている部分はかなり大きい。あとは男女ともに結婚する年齢が30歳近いのが普通になっていて、30歳を超えていたり、東京とかは女子は30歳を超えているが、こうなると当たり前バイオロジカル(生物学的)なりミテーションがやってきてしまうという話なので、むしろ若くても子供がつかれる社会にしてしまうということが非常に重大で、そこができない限りこの問題は本質的には解けないので、ここに関して本当に解くのであれば、そこを踏み込まないと問題は解けない。
- ・長寿と少子化は人類の繁栄の結果なわけですけども、豊さに伴って、そもそも多めに産む必要はなくなり、子供も非常に金がかかるということと、晩婚化で不妊の確率が上がっているのと、キャリア化に伴って少子化が加速される話、これはロジカルに起きている上、掛け算になっちゃっているんで、こういうことがあろうと、若くても産も

うと思える理屈をとにかく充実させないと問題は解けないので、本当にこの少子化問題をストレートに解くのであれば、そこに踏み込まないと解けないと思う。

- ・出ていく、出ていかないの話とこの問題はちょっと切り離して、ストレートにここでは若くてじゃんじゃん育てられる、育つインセンティブに満ちた空間にするというのをうまくやらないと問題は解けないと思うところです。

【齋藤委員】

- ・この少子化の問題というのは、やっぱり核家族化だと思う。昔は3世代、おじいちゃん、おばあちゃんが出て、それから息子さん、娘さん夫婦が出て、そこでお孫さんがいる。その中で、子供たちは育ってきたわけです。明治の初頭で、イギリスの旅行作家のイザベラ・バードが日本に来たときに、いろんな場面で子供たちの笑顔がすてきだ、子供たちが笑っている、しょっちゅうその子供たちの世話をしに、おじいちゃん、おばあちゃんとか、それから主婦の人が来て子供の世話をしている、これはイギリスにはないことだと。日本ってすごい子供たちにとって幸せの国だって書いてある。もう一度やはり日本的なよさというか、おじいちゃん、おばあちゃんなんかで子供さん、お孫さんを見てくれるような社会というのを、もう少しできるような形にしてあげればいいのかかなと思っている。
- ・西洋の場合だと、結構ボランティアという形でいろんな社会奉仕に対して参加されて、しかも参加したことによって非常に精神的な充実度が高まって、ウェルビーイングが高まっている。それから、今、舟橋村でも、地域で子供を見ましようという形で出産率が上がっているが、やっぱり地域で見る、それからボランティアという制度をうまく使ってあげる。日本ではどうしてもボランティアというところがちょっと大きく考え過ぎだが、少し敷居を低くして、おじいちゃん、おばあちゃんでもまだ元気なだけで定年した方に子育てを手伝っていただく、それから、いろんな時間外での学校でのことに対してサポートしていただくとか、そんな形で対応して、地域ぐるみで子育てをするんだという形をしていけば、私は、住民の方々も安心感があって、それから女性も安心して継続して就職、仕事を続けられるんじゃないかなと思う。
- ・地域ぐるみでやるということと、うまくシニア世代を使ったらどうかと思うが、そのあたりはいかがか。あと、ボランティアというのは、海外では普通にやっていると言われる。海外の方に宗教的なものがあるからボランティアをするのかと問うと、そんな

ことないと否定されます。西洋ではボランティアするのは当たり前だからやっていて、別に報酬ももらわない。本当に精神的に非常に晴れるんだと言われる。

- ・日本もしくは富山でもっとそういったことも積極的にやるんだということで、最初はちょっと導入的に、行政的な仕組みが必要かなと思うが、それが広まってくると自然な形でボランティアが進んでいくのかなとは思う。皆さんで助け合いしながらやっていかないといけないので、そういうのがあれば、すごくいい社会になる。

② まちづくり戦略PT・持続可能な魅力ある田園地域検討専門部会

(事務局より資料2に基づき説明)

【安宅委員】

- ・空間づくりの話について、いろんな地域を見ていてすごく感じる事としては、首長ドリブンのプロジェクトは大体失敗するという事。なぜなら、退任されちゃうから。どんなにすばらしい首長でも、二、三十年しかやれない、異常に傑出していても。でもまちづくりは平気で30年、40年、50年かかるので、10年ぐらいでできることはほとんどない。なので、異常な長さでコミットできる運動論を立ち上げられるかに未来がかかっていて、そういう意味で、朝比奈さんとかはすごくいろんな地域でそういう人を育てられているが、実はあれが本筋の可能性が高い。
- ・それに類似することが少し出ていたと思うが、そういう人を育てるということをやるという、ブースターソースとして公のリソースが突っ込まれるんであればすごくいいなと。逆に予算ドリブンの、とにかくその金が終わった瞬間に消えるプロジェクトだと何だか訳分らない、本末転倒な話になる。
- ・敵対する人が新しい首長になると潰されるケースは多々あり、私も目の前で何度か起きて、つい最近も起きた。首長は変わらなかったが、議長が敵対勢力になった瞬間に潰されたケースもあるし、結構それが難しいところ。やっぱり下から湧いている感じがめちゃくちゃ重要なので、留意していただきたい。

【朝比奈委員】

- ・私はここが非常に大事だと思っている。特に農業のところ。これはもう富山県に限った話ではないが、日本全国で見ても、大規模集約化と輸出をつなげると、日本の農業はかなりチャンスだと思う。私は出身元は経産省だが、正直、経産省の若手とか、具体名で

言うたとえば今、法務大臣されている元経産省で農林水産大臣も勤められた齋藤健さんとか、その他いろいろ経産省出身の人たちとずっとしゃべっていても、今から半導体とか自動車とか素材とか、もちろんすごく大事だが、そこを伸ばすというのは非常に難しい中で、農業とか観光って伸び代しがなくもう大変なチャンスだという人が多いと感じている。ここはもうぜひ富山でさらに深めていただきたくて、特に輸出のところを意識してぜひ進めていただければと思います。

【安宅委員】

・「風の谷を創る」運動論をこの6年近くやっているが、補足的情報で、今の朝比奈さんのお話に重なるが、昨今、国交省や環境省とかの会議に結構呼び出されており、国家サイドで関心が高まっている。なので、これを様々な計画とかに打ち込もうという動きが相当強まっているということは間違いなく、ぜひやるからにはトップランナーで突き進めると美しい未来になると思います。

③ ブランディング戦略PT

(事務局より資料2に基づき説明)

(PT座長より補足説明)

【高木委員】

・前提として、富山県が様々なランキングで二十何位ということで、なかなか印象が薄いと。幸せ人口1000万、関係人口1000万にしているのに、その手前にある認知をもっと作っていかないとなかなかそのビジョンの達成もできないよねというところで、今まで取組みもいろいろあったけれども、ばらばらしていてなかなか成果につながっていなかったというところが出発点になっている。

・このブランディング推進本部の立ち上がりの会議があったが、その会議の様相がメディアに出て、一部ニュースになって賛否両論だった。いい感じに批判的コメントもたくさんあったが、一部が切り取られて「寿司で一点突破」だけ出たので、そうなるのは仕方ないかなと思いつつ、でも前提として、そもそもほぼ印象がなかったというところから、やっぱり行政の取組みってどうしても公平性の観点から最大公約数的なぼんやりとした方針になりがちなのが、ちゃんとある意味、寿司という切り口をもうアセットとして掲げたことで、どうなんだということも含めて議論できたのはよかったし、これは10

年スパンでやっていくという話なので、議論していけばいいかなと思っている。

- ・そこであった意見も踏まえてコメントさせていただくと、認知とか推奨意向を9割に持っていこうということを10年後の目標として立てた。そのときに、香川のうどんというのを引き合いに出したが、それと比べるとまだまだじゃないかみたいな感じの意見が多かった。東京の江戸前寿司に比べると味のクオリティーは全然かなわないよねみたいな話とかもあって、それはそうだと。やっぱりこれって、そもそも10年後を見据えた10年構想なので、その中でずっと変わらないものとして富山の地形、4,000メートルの標高差とか魚種の豊富さというポテンシャルもありながら、これからやってくるインバウンド、観光の中で、世界と富山が握手できるポイントとして寿司というのを掲げていると考えていったときに、ポテンシャルはあるけど、今実態はまだまだそうじゃないということでもあると思う。
- ・やっぱりこの作り手の支援が大事だと思っている、良質な職人やシェフをどれだけ富山に増やせるか、育てられるかというのが大事かなと。素晴らしいクリエイターが集まれば、寿司というものの発想もどんどん広がって行って、富山ってどんどん新しい寿司が生まれたりとか、海外の人からしても、寿司といえばというので印象づけていけるんじゃないかなと思っている。
- ・やっぱりブランディングというと情報発信みたいなイメージが強いが、今の時代はSNSとか含めて情報発信は個人が強い時代なので、行政でできることって正直そんなにない。だからそうではなくて、本質的には情報発信じゃなくて、作り手が集まる環境づくりを県がやっていくということが大事かなと思う。
- ・10年後、そのうちの1年目としてちゃんと、作り手がチャレンジできる機会・舞台を用意したりとか、いろんなお店や学校と組んでこの取組み自体を育成的な機会として位置づけて行って、魅力ある人たちがどんどん集まってきて、富山から面白い寿司、新しい寿司、おいしい寿司がどんどんできて行って、何かあそこで起きているなという状況をつくっていくということが大事かなと思う。

【安宅委員】

- ・寿司、素晴らしいと思う。うどんと違って糖尿病になりにくいのもとてもいいし、魚はうまいし、米は無限にあるし、米を炊く水もめっちゃうまいのでばっちりだと思う。それで、私はほぼ東京人なので、感覚で言うと、富山の回る寿司は東京の半額で3倍うまい

です。問題は、東京の3万円の寿司に当たるものがあまりない。なので、庶民レベルのやつはまあ圧勝だと思ふ、正直。上をどうつくるかが同時にやっていると、めちゃ勝てるんじゃないかなと思ふ。幾つか衝撃的にうまい寿司屋さんがあるのは知っているが、もうちょっと数が要る。ブランディングは十分いけると思ふ、素材として。

【朝比奈委員】

- ・本当に高木さんの寿司のプロジェクトは面白いと思ふ。ぜひ私も大いに期待したい。私も色々な地域活動を見ていて思ふのは、例えば北関東のところだが、利根沼田地域など、安宅さんにも大変御支援いただいているが、やっぱりガストロノミーを考えていくときに、内輪の人がどう盛り上がるかが結構大事な気もする。外から連れてくるのもすごく大事だが、例えば高崎パスタとか八戸のブイヤベースとかいろいろあるが、外から人を連れて来る前に5年ぐらい、もうその中の人にめちゃくちゃ愛され、そこから5年ぐらいたったところで満を持して外に宣伝していくという、一過性でわーってきて、わーってなっちゃわないように、中の人の温度をどう高めるかって結構大事かなという気もして、ポイントの一つかなと思ふ。

【高木委員】

- ・本当におっしゃられるとおりで、やっぱりブランディングという、外への発信だったり、どれだけ外から人を連れてくるかというのを急いでいる感じはあって、それはすぐになるものではない。なので、安宅さんの話でもあったように、素晴らしいお寿司屋さんだったりとか、または寿司が発展したような新しい料理を作っているシェフがいたりする中で、その人たちと共に手を組んで、いかに中が盛り上がっていくようにするかということにもっと焦点を置いたほうが、どんどんその人たちの取組みだったりその人たちの個人のSNSだったりといったつながりの中でじわじわなっていて、評判で何か面白いことが起きているっぽいということになっていくと思ふ。どうしてもこういうブランディングって外を振り向かせようという議論になりがちだが、中の熱をどうつくっていくか、コミュニティを育てていくかということが大事かなと思ふので、そこは議論のポイントとして、もう1回明確にしたほうがいいかなというのは改めて思ふ。
- ・これから、多分食界隈の生産者だったり流通を担われている方だったり、シェフだったり、いろんな方々といかに連帯して、富山の寿司やそれを起点にした食、工芸、お酒の

文化などを含めてどう盛り上げていくかという、熱をつくっていききたい。

④ 新産業戦略PT

(事務局より資料2に基づき説明)

(PT座長より補足説明)

【藤井副座長】

- ・国際標準の件は、今までこの成長戦略会議では、富山県が自発的に内側からボトムアップに盛り上げていくというような、内発的な話がすごく多かったが、この件に関してはやっぱり外の世界の潮流を見誤らないということ、ただ単にリアクティブに対応するんじゃなくて戦略的受動性というところがものすごく重要な分野だと思っている。そういう意味で、モニタリングやトレーサビリティのシステムなどに関しても、あるいはどういった分野にどういった対応をするということに関しても、ガラパゴスに陥らないようにしながら、なおかつ1歩、1つ頭を抜けられるようにしていくということが重要と考えている。
- ・クリエイティブやデザイン経営の視点についても、まちづくりから、ブランディングから、ウェルビーイング全部に関わっていくところなので、その人材集積というのはきちんとやっていきたいと思う。

⑤ スタートアップ支援戦略PT

(事務局より資料2に基づき説明)

(PT座長より補足説明)

【藤野委員】

- ・この取組みも2年目になり、T-S t a r t u pもこれから2週目になる。T-S t a r t u p企業を今期、5社とか6社選んでも全体で十数社なので、全体の影響は限定的だが、この取組みですごく大事なことは、スタートアップのエコシステムをつくること。富山県の中に、もちろん起業家をつくるのが大事だが、起業する、起業したいという人は実は一定割合いて、それを応援してくれるエンジェルであったり、銀行であったり、間接金融でサポートする証券会社であったり、税理士であったり、公認会計士であったり、あと地域の先輩たちが起業家を愛でて、サポートする仕組みをつくるのが重要。なので、私たちがとても重要視しているのは、このようなスタートアップエコシステム

をつくるというところが、T-Startupであったり、SCOPであったり、様々な取組みの背景になっていると理解していただきたい。

- ・結果的にこの文化ができれば、この取組みがあと数年で終わったとしても、自動的に起業家が出てきて、最終的にIPOするような会社が複数出てくる地域になるのではないかと期待している。

⑥ 県庁オープン化戦略PT

(事務局より資料2に基づき説明)

(PT座長より補足説明)

【朝比奈委員】

- ・昨年まで藤井前座長の下で非常にシユアに取りまとめていただいて、去年、かなり具体的なKPIを2つ出されていた。そのKPIについて、まだ未達成の部分もちろんあるが、庁内の人材のチャレンジ制度とか他県と比べた場合のDXの推進というところが結構できてきたところもある。そのため、今年はかなり包括的に、そもそも論的にゼロからもう1回議論して、最も大事なところを重点的にやっっていこうじゃないかという議論になった。
- ・そういう中で、大きく県庁のオープン化と考えるときに、多分柱は4つ。特に人材をどうしていくか。今日もこれまでの議論でもさんざん出ているが、やっぱり支える人を何とかしていかなきゃいけないという、庁内の人も含め人材の話、組織の話、そして業務の話、広報をちゃんとどうしていくかと。この4つを今までの枠組みとうまくすり合わせるような形で出していこうという考え方の中でできている。
- ・それで、ここに出ているように、1・2番目の点は人材・組織になりますけど、特に人事交流とか、民間経験者の採用の強化とか、マインドセットから変えていくことは重要。この辺、例えば、私が今、神戸市の新しい人材獲得戦略の懇話会で座長をやらせていただいているが、神戸は、新卒で良い公務員が最近なかなか採りにくくなってきたのもあって、もう半分経験者にする決めてコミットして既に始めている。もちろん新卒も大事だが、特にこういうマインドセットのある社会人経験者をどんどん入れていくということは大事ですし、職員そのもののマインドセットをやっぱりどうしていくかというのが鍵になる。
- ・2番目の業務。これもかなりKPI達成できているところもあるが、さらに外の方から

見てもできるようないろんな業務マニュアルとか業務の見える化が大事になるし、そもそもDXを進める上でよくBPRが大事と言われるが、本当に業務フローそのものがないのかというあたりも考えていく必要がある。

- ・最後に、やはり広報、きちんと伝えるということが大事だということで、できれば可能な限りローデータなんかも出していくとかも含めてオープン化を進めていくという形で進めていこうということ。今回本当に驚いたのは、私もいろんな市町村とか県でアドバイザーをやらせていただいているが、こういう議論が出はじまったらもうかなり富山県庁さん側からすごく前向きなものが出てきて大変驚いているところ。今後の進展をますます期待したい。

【齋藤委員】

- ・県庁に限らず、いろいろな教育の壁というのが結構あって、それを取り崩すのはある程度、トップダウンでやらないとうまくいかない面がある。私たち富山大学では、大学院を大改革して、今まで学部の上に修士が乗っていて、その上に博士課程が乗っていたが、全部やめて、少なくとも学生の指導に2人の教員が、主担当と副担当として就いて、そのために、複数の分野で構成するような大学院をつくった。これは、広い視野を得てもらう、それから勉強してもらうための一つの仕組み。随分反対はあったが、トップダウンでやると、大学院の入学者がこの2年間で約100名増えた。これはやっぱり学生たちにとって魅力ある教育を提供したから、大学院に入っていたいただいたと思っている。
- ・やはりこういった組織を超えたプロジェクトを拡充するだけではなくて、その後、県民の方からアンケートなり、またいろんな形で県民から支持されるんだということを示していただくとさらに改革が進むと思う。単に変えるだけではなく、しっかり評価していただいて、それで、実際自分たちがやったことがこれだけ評価されているんだということを実感できるようなシステムで、ぜひともお願いしたい。

【土肥委員】

- ・少子化のところちょっと話を戻す。個人的に、どうしても子育て家庭の育児の負担感の軽減という言葉が、私の中ではしっくりきていない部分もある。今回はアンケートの結果もあって、この課題のテーマでいいとは思いますが、「育児の負担」という言葉が、やっぱりまだ育児をしていない若者たちに対して、育児は負担ですよというメッセージに

もなってしまう部分もあると思っている。育児が負担なのではなくて、育児に集中したいけど、ほかの何か、例えば家事もしなきゃいけないとなれば家事が負担なのかもしれないし、育児にもっと時間を充てたいけど、お金がかかるから仕事もしなきゃいけないとなれば、人によっては、育児が負担ではなくて、働くこと自体が負担だったりとかすることもあると思う。今回はこの課題で取り組みながらも、少しでも早くこの「育児の負担」という言い方ではなく、育児とそれ以外のものとの両立なのか、子育て世代の、それこそウェルビーイングというところに、もうちょっと前向きなメッセージとして課題を掲げていけたらいいなと、読めば読むほど感じてしまうところがあった。

【安宅委員】

- ・1つ、今の土肥委員の話にかぶせたいが、この問題は、男が何をやるかの問題に直結している。これは昔、私がやった分析だが、日本って全然家事育児労働していない、男って。信じられないほどしていない。ここの委員の中に、男性委員で、10分以上家事育児労働している人は何人いるかちょっと聞きたいが、私がいつも聞くと、100人に1人もいない、そんな人。90分ですら1割とか。40分ですら半分もいないときもあるみたいな状態。だから、男はちゃんと家のことをやれということ、この本題って実は。それをやる県にするという問題であると思う。根本的にそこを直視していますという話をしないと、女性のウェルビーイングはいつまでたっても上がらないという問題だと思われる。

(3) 今後のスケジュールについて

(事務局から資料3について説明)

【中尾座長】

- ・経営者として、ウェルビーイング経営という言葉が何回も出て、何か1つ、ウェルビーイング経営というのはこういうものだというモデル・指標を示してほしい。一般の経営者は漠然と考えるだけですぐわからない。だからウェルビーイング経営のモデルを示していったら、将来これをやろうじゃないかと非常に考えやすい。
- ・それからもう一つ、もう数十年前の話、私は全国に事業所を展開していったが、どうも

石川県は出にくかった。ところが最近、新田知事が仲よくしていただいて、ぱっと雰囲気が変わったと経済界は言っている。やはり国際化も大事だが、県際化ということを企業経営の中でもうちょっと、お寿司を全国から食べに来いと言うよりも、まず、岐阜県や長野県や新潟県、こういう富山県を中心とした県際化を進めていく。そういうことの中で、そこへ事業所をお互い出し合って、あるいは、今ちょっと私は1つやっているが、岐阜県の会社と富山県の会社の合弁の会社をつくって、どっちに事業所を置くかと言っているが、我々の範囲を広げるという意味で、県際化をひとつ、方策として、また御検討いただきたい。そのことによって相当のことが解決していくような感じもしている。

【新田知事】

- ・ 幸せ人口1000万を目指しているが、昨年度は、我々で推計したところ、350万人まで来た。リアル人口101万人だが、現在、富山県の関係人口、幸せ人口は350万。これはかなりストイックに推計したもの。本年度何とか、いきなり倍は難しいが、着実に幸せ人口を増やしていきたい。そのためにも、本年度のアクションプランをしっかりと実行していく、そして、並行して令和6年度の取組みも磨き上げていく、そんなことで行きたい。
- ・ 子供たちのウェルビーイング、やっぱり学校の役割が大切というのは、この前の教育大臣会合の一つの帰結点でもあった。でも先生方が忙し過ぎる、何とかこれを解消してあげたい、それからICTでできることは代替してあげたい、そして子供たちに向き合う時間を少しでも多くして、ウェルビーイングを上げていく、そんなことに取り組んでいきたい。一方で、子供たちだけではなく、シニアの皆さんという御意見もあった。長生きが楽しい、そうなるようにこれもまたしっかり取り組んでいかなければならないと思っている。